

研修会

1 泊研修 富士山

吉田・晝間・武田・宮川の合作

日 時：2014年10月30日（木）～31日（金）

場 所：富士山5合目御中道、青木が原樹海、湧水の里水族館

参加者：指導員25名 会員外3名

担当指導員：盛一昭代

1) 10月30日 富士山5合目御中道～奥庭 (吉田祥子)

紅葉を楽しみながら到着した十数年振りの五合目は、観光バスが並び、外国語がとびかい、すっかり変わっていました。3班に分かれ自然解説員のご案内で御中道に向かう。かつて御中道は富士山信仰の修行の道だったとのこと。富士山の下には先小御岳火山、小御岳火山、古富士火山と三つの火山が重なり、その上に現在の富士山が約一万年前に形成されたが何度も噴火をくり返している若い火山である事などを伺う。ダケカンバ、ミヤマハンノキ、ミヤマヤナギ、ハクサンシャクナゲ、林床にはコケモモやシラビソの幼木、コケ類等観られました。強い偏西風や積雪で東側に偏った枝、曲がり地を這うような樹形など、それらは厳しい自然に耐えている姿です。視界が開け砂礫地に出る。そこはなだれの通り道だそうで、下方に黒い大きな長方形の物が見える。なだれの勢いを弱めたり、方向を変えたりする導流堤で、場所により斜面に縦や横に設けられている。山頂を見上げると青空に白い峰が映え、スコリア(5cm以下の溶岩、黒っぽい軽石)に覆われた黒褐色の山肌には、紅葉したオンタデが点々と見えとても美しい。オンタデは太い根を2m以上も伸ばし、栄養や水分の少ないこのような所でも生育出来、そのオンタデを足がかりに芽生え、生長したカラマツが黄金色に輝いて踏ん張っている。過酷な環境でも分布を広げようとしている植物の強さ、たくましさを感じ入る。

御庭から駐車場へ。焼山と木山の境、森林限界を実感した御中道歩きでした。



参加者28名全員

2) 10月30日 室内研修：テーマ：「世界遺産 富士山」 (晝間初枝)

講師：山梨県知事政策局富士山保全推進課富士北麓分室 小池正幸氏

内容：富士山の成り立ち、恵み、植生、世界遺産への取り組みと課題等

- 富士山は4つの山(先小御岳火山、小御岳火山、古富士火山、新富士火山)が重なってできている。今の富士山の形ができたのはおよそ1万年前である。
- 富士山は活火山である。三大噴火、「延暦の噴火」「貞観の噴火」「宝永の噴火」を経て、富士山周辺の地形がつけられてきた。以後300年は噴火していないが・・・。
- 山梨県と静岡県に跨る富士山、山頂は何県？噴火口に神が宿るとされることから、噴火口(8合目)より上は麓にある浅間大社のものとなっている。
- 富士山の水の恵み。水を通しやすい新富士、古富士は水を通しにくいので雨が滲み出て豊富な湧水として様々に利用される。水の販売、吉田のうどん、忍野八海などの観光・・・。

- 富士山は垂直分布が明瞭で、暖かいところから寒いところまでの動植物が多数見られる。
植物:2,100種、動物:823種、計3,923種(北側だけのデータ)
- 富士山は、植生や樹形から、森林限界を超えてさらに上へ登ろうとする植物、激しい積雪やスコリアに馴化、適化する植物の「生きる」をみることができる。
- 富士山を後世に残すために「富士山憲章」を定め、環境保護を推進している。
- 富士山は「信仰の対象と芸術の源泉」として世界でも評価され、平成25年6月世界文化遺産に登録された。構成資産は浅間神社、三保松原など25か所

3) 10月31日 青木ヶ原樹海・富岳風穴 (武田宏子)

2日目午前中、ネイチャーガイドの案内で、富士山北西麓に広がる原生林「青木ヶ原樹海」を歩きました。噴火によって流れた溶岩流上に発達した原生林と洞穴を巡るコースです。今から1100年以上昔、富士山北西山腹に位置する長尾山等の側火山の大噴火活動により、多量の溶岩が流出。溶岩原とたくさんの洞穴をつくりました。この溶岩流の上には千年の歳月をかけて形成された3,000haにも及ぶ原生林「青木ヶ原樹海」です。灼熱の溶岩が固まり、草木のないごつごつした溶岩原に、まず地衣類やコケ類が生え、次に陽性植物の草本類が生え、さらに土壌化が進む(100年に1cmの腐葉土)と陽性の低木、そして陽性樹木の林(ミズナラ・カエデ類)になり、この林の下で陰樹が育ち、長い年月を経て、現在のようなツガ・ウラジロモミ等を主体とした陰樹となり安定した植生になっているそうです。ツガ・ウラジロモミ・ヒノキ・ゴヨウマツの巨木と幼樹、ミズナラ・コナラ・ヒトツバカエデ・コハウチワカエデ等の高木(紅葉、黄葉がきれいでした)、ソヨゴ・アセビ・ミヤマシキミ等の低木が密集し、樹下には一面にコケ類が生えていました。樹齢300年の榎の巨木帯。ここでは溶岩の上に樹木が生えているため、根を深く土の中に張ることができません。このため、積雪や風等、少しの環境の変化で木が倒れてしまうデリケートな森林なのです。八岐大蛇(ヤマタノオロチ)のような形状の檜の奇木、アニメーション映画やファンタジー映画に出てきそうな溶岩と樹木のダイナミックな風景など一つ一つの自然が「青木ヶ原樹海の魅力」でした。蝙蝠穴は海拔925m、穴の総延長386m。富士山麓最大級の溶岩洞窟。冬でも温暖であるため、過去には多数のコウモリが生息。風穴(氷穴)は道内の水が冬期に氷結し、夏期も解けないため、洞内の温度平均3℃。かつては、種や繭の保存に利用されていたそうです。



コウモリ穴内部

「青木ヶ原樹海」

今回は、その成り立ちと経過を知ることができ、樹海を楽しむことができました。

4) 10月31日 富士湧水の里水族館 (宮川栄子)

緻密な計画の締めは海無し県の「山梨県立富士湧水の里水族館」への期待はご存じクニマス。一度は絶滅とされていたが70年ぶりに本栖湖、西湖にて発見。外見はヒメマスによく似ているようですが、水槽で泳ぐ姿は白銀色で優雅でした。2012年1月に西湖で水深30~40mで捕獲、成熟度、雌雄の鑑別、採卵、採精、受精、発眼、ふ化させ人口産卵を行い育てられたものだそうです。メスとお腹を押してそれぞれ卵と精液を絞り出します。12度の水温で約20日、黒い目が見え始めあと1ヶ月で赤ちゃんが誕生します。赤ちゃんのおなかには栄養のある袋がついていて、しばらくはエサをとらずに生活します。おなかの袋が小さくなると自分の口からエサを食べるようになります。水田などでも見られなくなったゲンゴロウ、ミズカマキリに魅入り、タガメのチョコチョコ動くさまを見たり、チョウザメは鱗のかたちからついた名前とか。食用にいたる筈のブラックバス、ブルーギルのことなど。非日常のお話でした。